

これからも
YUTORI CLASSと

地元・鹿児島で70余年、木造注文住宅を手がける
ヤマサハウスを代表するフラッグシップモデル

「YUTORI CLASS(ユトリクラス)」。

この度、「2023年度グッドデザイン賞」を受賞しました。

当社としては8作品目の受賞であり、県内最多受賞を誇ります。

今回は、グッドデザイン賞に取り組んだスタッフに、

その「YUTORI CLASS」の魅力についてお話しいただきました。

住み継ぎながら思い出を重ねていき、

木々が年輪を増すように家族の幸せを

大きく広げる理想の住まい、

「YUTORI CLASS」の

全貌をお届けします。



グッドデザイン賞とは?

日本唯一の総合的なデザイン評価・推奨の仕組みで、80年以上「Gマーク」とともに親しまれています。デザインにより暮らしや社会をより良くするため、さまざまな視点が審査ポイントに。

専業職員の方のコメントをご紹介!

鹿児島県ならではの住宅を、地産地消の方針で実現することで、地域活性化と文化継承を目指すプロジェクトである。地場産材を用いて大スパンを実現する技術力。地域の気候風土に適合した素材の選定やデザイン、技術継承を目的とした職人の育成。これらすべてのアプローチをとっても、長い時間軸で家づくりを捉えていることがよくわかる。このような長期的な時間軸のなかで、住み手・職人・地域のそれぞれが恩恵を受けられる「三方よしの家づくり」を進める姿勢が高く評価された。



今回のグッドデザイン賞賞に携わったスタッフたち

“永く住み続ける”をコンセプトに 3つのポイントがある「YUTORI CLASS」



POINT 02 : 間

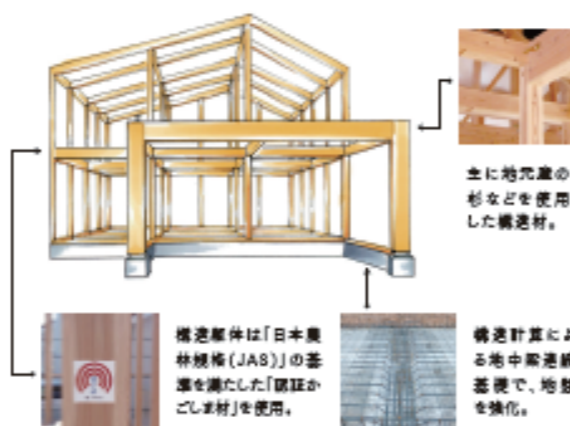
可変できる間で住み続ける

大きな箱の中でつくることができるのは、自由度の高い間取りです。家族の気配をほど良く感じられる、空間全体を活かした立体的な間取りを実現します。そのため、一人ひとりが“今”居たい場所で快適に過ごせる空間をつくりあげます。

POINT 01 : 箱

大きな箱で住み続ける

鹿児島県産の杉を使用した柱や梁などの構造材、高精度・高強度の構造ブロックを使用。荷重や地震に対して耐えられるかといった計算も行うことで、大空間・大開口の家が叶えられます。将来的にライフスタイルに合わせて間取りも可変できます。



「地域循環につながる家」
「YUTORI CLASS」

ふたりを含む計4名のメンバーで挑み、お互いの意見や考えを尊重し合いながら打ち合わせを重ねたそう。なかでも苦戦したのは、応募資料づくり。「決まった文字数に文章を取める必要がありました。メンバーそれぞれの想いがあるけれど、ブランドの魅力やポイントを端的にまとめるのが大変でした」と西村さん。さらに西村さんは、「私は『地』のポイントの文章を考えましたが、竣工後ヤマサの取り組みは業界全体に広く知られて追隨する企業が出てほしい」と言います。

受賞がわかると、チームでかなり盛り上がったのだとか。「安心して住み継ぐことができる家なので、孫の代までを考えて家づくりを行っていただけのことをもっと周知したい。それに鹿児島に「YUTORI CLASS」の家が増えると地域循環にもつながる。住まい手にとっても地域にとってもすばらしい家なんです」と西村さんが話してくれました。

た。けれども、世の中の状況や家族のライフスタイルが変化しても、安心して快適に永く住み続けられる家というコンセプトが決まっていたら、考えがブレなくなりました。だからこそ、お客様にご提案したい住まいだと思えたんです。」

このメンバーで
グッドデザイン賞に
取り組めて、
本当によかったです！

建築士
前屋敷 千珠

2010年入社、インテリアコーディネーターを経て、建築士に、「素敵な家をつくってお客様に喜んでいただきたい」という一心で仕事をしています。



大変なことも
多かったけれど、
何より楽しくて
学びの多い日々でした。

建築士
西村 汰海

2014年入社、建築士として「お客様の要望をヒアリングしたうえで、プロの目線で提案する」ことを大事にしています。



当社を代表するブランドである「YUTORI CLASS」が、「2023年度グッドデザイン賞」を受賞しました。グッドデザイン賞に応募するメンバーに選ばれたときは、会社から想いを託された」と感じました」と言うのは、担当の建築士・前屋敷千珠さん。もうひとりの担当者である建築士・西村汰海さんは、「そもそも「YUTORI CLASS」は魅力的なブランドですが、デザインポイントとして挙げた『箱・間・地』が評価されたと思っています」と話します。

**受賞までの道のりと
たどり着いたコンセプト**

受賞までは紆余曲折ありました。「昨年4月にプロジェクトが発足して、一次提出まで週に2回は集まって打ち合わせを重ねましたね。企画を何度も練り直して、上司のチェックを経て…。簡単ではなかったからこそ燃えました」と前屋敷さん。コロナウイルスの感染拡大は少しずつ落ち着き始めましたが、完全に収束したとはいえない時期で、住まいの中で家族と顔を合わせられる空間を求めていたものの、それも長期化して少し疲れを感じ始めていたころ。だからこそアフターコロナを見据えた空間づくりが必須でした。西村さんは言います。「永く住み続ける」というコンセプトにたどり着くまでは大変でした。



「YUTORI CLASS」とは、時代に合った理想の住まい